

暮らしと水の距離の変遷

沖縄本島の近・現代における “祭祀的に近い”井戸水と“擬似的に近い”水道水

Transition of Distance between Livelihoods and Water :
“Ritualistically Near” Well Water and “Pseudo-near” Water Supply
in Modern and Post-war Okinawa

武井 基晃

TAKEI Motoaki

はじめに

① 戦前の水と生活

② 復帰直前における近い水の記録

③ 戦後の沖縄の水事情

④ 326日におよぶ給水制限

おわりに

【論文要旨】

沖縄本島の近・現代における日常の水・儀礼の水の所在について、人びとはいかに水と共に生き、また人びとと水からの距離はいかに変遷したのだろうか。もともと水資源に乏しい沖縄本島では有機フッ素化合物（PFAS）汚染問題、少雨による数十年ぶりのダムの貯水率の低下と給水制限の危機（令和5～6（2023～2024）年）など、水への懸念は完全に拭い去られてはいない。

本論では、沖縄本島を中心に、大正時代（天水、湧水）～昭和初期（昭和8（1933）年の水道開通前後）の那覇の水事情、昭和43（1968）年の調査成果『沖縄の民俗資料』に掲載された県内各地の水をめぐる習俗の整理と分析、本島北部の水資源を中南部の都市部へと送る戦後の「北水南送」、そして簡易水道の放棄を整理する。その際に参照するのは嘉田由紀子や森瀧健一郎の「近い水」「遠い水」論の知見である。人びとは「近い水」を自分たちで管理し活用しながら生きてきたが、1960年代以降の日本では、管理の上でも距離の上でも「遠い水」を用いた水道に移行していった。

水資源に乏しい沖縄本島における遠い水への依存は、那覇一帯の都市部だけでなく沖縄本島全体におよぶ水不足・給水制限を引き起こした。中でも昭和56（1981）年7月から同57（1982）年6月の歴史的大規模な給水制限について当時の資料および今日のフィールドワークで得た体験談・証言をふまえて描く。当時の断水を回避するために導入された都市部の風景に溶け込んだ水タンクは、遠い水を自宅敷地内で擬似的に近い水のごとくとどめておくためのその場しのぎの手段だった。

今日もかつての水源に対する村落祭祀がムラや自治会に引き継がれて続いているが、拌まれる井戸はもはや今日の暮らしを潤す水源とは限らない。その祭祀対象たる水は、過去に祖先の暮らしを潤した水という文脈を与えられ、祭祀的に近い水として思い出される。

【キーワード】「近い水」と「遠い水」、『祭祀的に近い』水、『擬似的に近い』水、給水制限、水タンク